

森

高齡者文学人生論

野上彌生子 (1972-85)

『森』：(1972-85) 「新潮」

『明暗』 (1907)

『その頃の思ひ出——師友のひとびと』 (1942)

岩橋邦枝『評伝野上彌生子』 (2011) 「新潮社」

迷路を抜けて森へ

野上彌生子が『森』の執筆をはじめたのは八十六歳で、九十九歳になっても頭がしっかりしており、執筆を続けた。ある日、自宅にかかってきた電話に出ると、先方はまさか本人とは思わず、取次ぎの若いお手伝いと間違えた。彼女はお手伝いになりすまし、うまく用件を断ったという。

そんな彼女も、あと三十数日で満百歳という高齢でしずかに息をひきとった。『森』はあと一章で完成するところまでこぎつけていたが、未完のまままで終わる。ちょうど師の夏目漱石の『明暗』が未完で終わったように。

奇しくも彌生子の処女作のタイトルも『明暗』だった。夫の豊一郎を通じて読んでもらったところ、漱石から懇切丁寧な評をもらった。「明暗は若き人の作物也。篇中の人物と同じ位の平面に立つ人の作物なり。自ら高い処に居って上から見下ろして彼我をかき分けた様な作物にあらず。夫故に同年輩以上の人の心を動かす能はず」「人情ものを書く文の手腕はなきなり。非人情のものを書く力量は充分あるなり」「『明暗』の著作者もし文学者たらんと欲せば漫然として年をとるべからず。文学者として生きるべし」。

この手紙をもらったおかげで、彌生子は文学者として生きる決意をする。次に『縁』という写生文の小説を書くこと、漱石の推薦により「ホトトギス」に掲載され、文壇デビューをはたした。



森

高齢者文学人生論

彼女の生涯をみると、人の縁に恵まれている。彼女はその縁をいかす能力を持っていた。それは天性のものかもしれないが、森の学校で「ものを考えること、精神的なるものを重んじること、そして疑うこと」を学んだ結果だともいえる。

森の教育者でキリスト教信者の巖本善治、夫の豊一郎、師の夏目漱石、若い頃の恋人の中勘助と年老いてからの恋人の田辺元、友人の工藤哲子、森田ぎん、伊藤野枝、宮本百合子などの縁はすべての彼女の精神的な成長に役だっている。

キリスト教や共産主義には理解を示したが、深入りはしなかった。戦争中にはほとんど作品を発表せず、「軍のお先棒をいちどもかつがなかったことということだけは、わたくしのこれまでの一生に、たったひとつのとりえ」と言った。

昭和十五年には、万一の東京空襲にそなえ、北軽井澤の山荘に疎開できるように工事をすませていたので、戦時中も食糧不足で困るようなことはなかった。戦後は吉田茂と宮本顕治を野上邸に迎えたことがある。吉田茂は息子の健一の結婚式の仲人をしてもらったお礼、宮本顕治は妻の百合子の死に弔意を示してくれたことへのお礼である。

岩橋邦枝『評伝野上彌生子』のサブタイトルは「迷路を抜けて森へ」だが、漫然として年をとらず、したたかに生きぬいたた文学者だと思う。

花の咲く草ばかりでなく、名もない雑草も、とげ草も、矢張り野に生うる権利を授かっている